

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 2 日現在

機関番号：15401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22730706

研究課題名(和文) 100年間の児童の表現分析と作品資料のデジタルアーカイブ化に関する研究

研究課題名(英文) Research on Analysis of 100 Years of Student Expression and Digital Archiving of Student Artwork

研究代表者

蜂谷 昌之 (HACHIYA, Masayuki)

広島大学・教育学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：60510542

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円、(間接経費) 660,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、富山県高岡市立博労小学校に明治時代より残されてきた児童の図画、習字、作文を含む卒業作品にみられる表現を、歴史的、教育学的検討を通して分析した。作品研究では、臨画教育の隆盛から大正自由教育期にかけての表現、および昭和戦時下における博労作品の欠落や表現教育等に関する調査を行い、児童の表現や教育実践の変容について検証した。また、明治期から昭和戦前期までの作品のデジタル化を完了し、今後、学術研究の基礎資料となるよう作品全体のデジタルアーカイブ化を進めていく。

研究成果の概要(英文)：The objective of this research project was to analyze the student artwork collected annually at Bakuro Elementary School, Takaoka-city, Toyama, since the Meiji era. By examining historical and pedagogical perspectives, the analysis confirmed that a change in student expression, as well as in teaching art, took place from the prosperity of copying education to free drawing education. It also included issues around the disappearance of the artwork during, and right after, the Pacific War. The artwork created before the wartime has been digitized in the project; the entire collection will be digitally archived and could possibly serve as a basic resource for further academic research.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：美術教育 児童表現 教育実践史 デジタル化 卒業制作 表現分析 図画教育

1. 研究開始当初の背景

富山県高岡市立博労小学校には、明治 34 (1901) 年の創校時より今日まで約百年の間、児童が卒業の際に残した作品が保管されている。当初は毛筆で徳目を書いたものであったが、その後、図画や作文が加わり、その数は三万点をはるかに超えるものになったという。百年以上に渡り蓄積された児童作品は、わが国の教育史を映し出す貴重な資料であり、同校に残された作品資料を分析することにより、児童の表現や教育実践の変容を知ることができる。また、こうした作品資料のデジタル化を図ることは、破損を恐れることなく永く後世に伝えることを可能にするばかりでなく、今後の学術研究における基礎資料としての活用につながると期待される。

博労小学校は明治 34 (1901) 年、博労置町尋常小学校として設立された。翌年の春、同校は 82 名の卒業生を送り出し、341 名の児童を進級させたが、当時は学業半ばにして退学する者や成績が悪く落第 (留級) させられる者も多かったという。明治の近代教育発足以来、尋常小学校では就学率をいかにして向上させるかを課題としていたが、博労校においても創立当初より明治期を通じて児童出席率は約八割に過ぎず、高岡市内五小学校中、最低位に位置することが多かった。このような状況のなか、無事に学業を終えた第一回卒業生は四本の軸に毛筆で「奉公」、「文武」、「貞節」などの言葉を書いて学校に残した。これが博労卒業生作品のはじまりである。もともと卒業生作品の収集、保存という発想は、児童の作品を通して就学への意識を高め、地域と学校との連帯感を構築しようとする学校創立時の方針に基づくものであったと言われている。就学率、出席率が共に低迷し、また退学率も高い状況を改善するため、博労校では校舎内に卒業写真と卒業作品を展示することによって卒業生の訪問を促し、就学拒否児童の勧誘を目指した。この試みが功を奏し、大正期には市内第一位の出席率を達成することができたという。

このようにして博労校においては図画、習字、作文の卒業作品が明治期から残されてきたのであるが、同校卒業生作品への関心は、まず、創校七十周年記念に編纂された『博労小学校史』(1971)、その十年後に発行された『博労児童作品史』(1981) にみることができる。これらはいずれも同校関係者を中心にまとめられたもので、博労教育に関する資料や元教師、卒業生から情報を得て調査が行われた。その後、図画作品に関しては土屋ら (2000-2003) の調査で明治 40 (1907) 年度から平成 12 (2000) 年度までの作品にみられる表現内容の分類が行われた。こうした調査では、これまでの美術教育史の潮流を裏付けるデータが示されているが、博労校の作品資料には臨画時代であっても単純に手本を写したのではなく、個々の作品に児童独自の創作要素が認められるなど注目すべき事実

が確認されている。

土屋らによる調査では図画作品の撮影を実施したが、当時の記録方法はフィルムによる撮影からスライドを作成し、それをデジタルデータに変換するという手間のかかるものであった。しかし、デジタルカメラの普及をはじめ、パソコンやハードディスクの性能が飛躍的に向上したことにより、処理能力の高い機材で高画質によるデジタル記録を行うことが可能となった。そこで本研究では、図画作品に加え作文及び習字作品を合わせて撮影し、作品資料のデジタルアーカイブ化を試みることにした。表現三種の作品調査を行うことは、児童表現の社会文化的側面に関する検討や教育学的検討に有用ではないかと考えたことによる。同時に作品調査の過程で図画作品だけでなく作文、習字作品をデジタル化することにより、将来的に美術教育分野以外の多様な教育研究への活用を期待することができる。

2. 研究の目的

本研究は、富山県高岡市立博労小学校に保管されている一世紀にわたる児童の図画、綴方 (作文)、書方 (習字) を含む卒業記念作品の表現分析を行い、それら作品のデジタルアーカイブ化を行うことを目的とする。本研究における調査では、同校所蔵作品の歴史的、教育学的検討を通して児童の表現を分析するとともに資料のデジタル化を進め、学術研究の基礎資料としての活用を目指すものである。

3. 研究の方法

本研究では、研究代表者の領域である美術教育に軸足を置きながら、博労小学校所蔵児童表現作品について歴史的、教育学的見地から調査を行うとともに作品資料のデジタル化を進めた。具体的には作品の調査をはじめ、先行研究及び学校関係資料の調査、関係者への聞き取り調査等を行った。作品調査では先行研究で明らかになっていない昭和戦時下における作品欠落に関する経緯や当時の児童表現に関する調査、大正時代の自由画教育の影響について調査を実施した。また、作品調査の過程において作品資料をデジタルカメラにより撮影し、資料のデジタル化を図った。

(1) 作品資料の調査

作品資料の調査では、博労校所蔵作品の实地調査をはじめ、先行研究の把握、および関連資料の収集や文献調査を実施した。作品調査では児童作品の保存状況を確認するとともに、明治から平成にかけての表現傾向を把握した上で、大正自由画教育や昭和戦時下に焦点をあて調査を行った。また、博労校の教育実践や卒業制作の取り組みに関して、同校沿革史や学校日誌等関係資料の分析のほか、当時の関係者である元教師、卒業生らへの聞き

き取り調査を実施した。作品調査においては、特に教育状況や地域、社会的調査、表現の発達に関する調査、題材、技法、性差等表現の分析と変容に関する調査、教科書、教育思想等に関する調査、図画、綴方、書方成績の横断的表現分析等を行い、卒業作品と各々の事項との関連を探りながら検証を行った。

(2) 作品資料のデジタルアーカイブ化

デジタルアーカイブ化では、資料のデジタル化に関する先事例等を参考に博労校所蔵作品の撮影を行い、デジタル化を進めた。作品に関する調査の進捗に合わせ、本研究では明治期から昭和戦前期の卒業成績（図画、綴方、書方成績）を対象とした。デジタル化の過程では作品資料を制作年毎に分類、整理し、データベースの機能を検討した。

4. 研究成果

(1) 作品に関する調査

表現作品の分析では、明治から平成までの一世紀に渡る博労作品の概要を整理した上で、大正期における自由画教育や昭和戦時下の教育実践に関する調査を行った。具体的には臨画教育の隆盛から大正自由教育期にかけての表現の変容、および昭和期の戦時体制下における児童表現や博労作品の欠落に関して、作品資料の分析や博労校の教育実践、地域情勢などの調査、元教師や卒業生への聞き取り調査等を行った。

昭和戦時下における作品欠落と表現教育

博労校所蔵児童作品には太平洋戦争期に作品の欠落があり、図画では昭和16(1941)年度より同22(1947)年度が該当する。作品のコレクションを不完全とするこの空白については、これまで詳しい検証はなされておらず、作品資料のデジタルアーカイブ化に携わる上で作品の行方に関する追跡調査を行い、当時の表現教育や卒業制作の実態を把握する必要があった。そこで、同校に保管される欠落前後の作品内容や表現の調査を行うとともに、太平洋戦争と高岡の教育に関する文献調査を進めながら当時の教師や卒業生への聞き取り調査、博労校関係資料等を手掛かりに教育実践状況について調査を進めた。

卒業作品欠落前の昭和10年代前半に残された表現作品には社会情勢を反映し、戦時体制にあることを示す内容が含まれていた。この時期の綴方成績には、たとえば防空演習や海軍兵隊になりたい等のテーマがあるほか、図画では国旗や慰問袋を描いたものなどがあり、時代を象徴する表現をみることができる。しかし、卒業作品として保管されるこの頃の図画成績の多くは、男女共に静物画や生活画、風景画であり、戦時色のある表現が多くを占めるほどではなかった。

元教師に対する聞き取り調査では、終戦を迎えた昭和20(1945)年度に第六学年を担当し、その年度末に退職した元教師から話を聞くことができた。この教師によると、昭和20

(1945)年度は博労校に保存するための卒業制作を行った記憶はないとのことであった。また、この年に卒業した複数の卒業生への聞き取り調査においても、卒業制作として学校に作品を残したことはないとの回答を得た。元教師は卒業をまえに、担任した学級の児童に作文を書かせたとし、今回の調査でそれを確認することができた。「六年間の思い出」と記された小さな作文集は博労校卒業作品の欠落を埋める貴重な資料であり、太平洋戦争期を駆け抜けた児童の生活や思考を今に伝えるものである。また、この教師は昭和16(1941)年度から同校に在職していたが、学校の卒業制作を残す取り組み自体を知らなかった。このことは博労国民学校であった当時、卒業制作の取り組みが行われていなかったか、昭和19(1944)年度まで保存していたが第六学年担任以外へは周知されていなかったかということ推定させるが、いずれにしても明治以来続けられてきた同校の伝統は一時途絶えていたことが明らかとなった。

卒業作品の欠落に関しては、『博労小学校史』の編纂に携わり、初めて卒業作品の本格的な調査を実施した同校元教師から話を聞くことができた。この教師は学校史を編纂した折、この欠落について当事者から話を聞いたという。それによると作品は終戦後、軍国主義を示す内容であったため焼却処分されたという。しかし、焼失した作品が何年度の卒業作品かは明確な回答を得ることはできなかった。その後、昭和23(1948)年度に再び作品は残されるようになったが、このとき職員の総意で伝統を復活させたという。この年の卒業作品は教師の描いたと思われる表紙絵や配給品の画用紙の使用等、「卒業作品」として博労校に残そうとする意志の伝わってくるものであった。戦後の昭和21(1946)年度、同22(1947)年度の卒業生の話によれば、いずれの年も卒業制作は行わなかったとする証言があり、卒業制作を復活させた話と合わせ少なくとも昭和20(1945)年度より昭和22(1947)年度までは取り組み自体が行われず、終戦直後の三年間、博労校の伝統は中断していたことが明らかとなった。

大正期の作品と自由画教育

このように作品の一部に欠落があるものの、博労作品の魅力は明治の創立期より毎年継続して児童作品が保管されており、そうした作品から表現技術や教育実践の動向、社会生活の状況等の変化を掴むことができる。たとえば、保存の始まった明治期の図画は毛筆による臨画作品であるが、大正時代半ばの作品には表現に大きな変化を認めることができる。これは自由画教育の影響によるものと思われるが、これまで詳しい調査がなされておらず、その影響がいつ頃から、どのような形でみられるのか確認することは教育思想及び実践史上、興味深いことである。

大正時代、博労校では図画及び手工科目は

一貫して加設科目として設置されていた。また、専科教師による指導は明治44(1911)年より実施されていたが、大正元(1912)年に専科制度が強化され、第二学年以上の図画手工授業は専科教師の受け持ちになった。これは校下に銅器や捺染等、伝統工業の地盤があるという地域性を含め、教科の専門性、特殊性を早い時期から認識していたことによるものと思われる。図画授業は第六学年において男子二時間、女子一時間であった。

大正時代初期の図画作品は、臨画がそのほとんどを占めていた。主な手本として、明治43(1910)年に発行された『新定画帖』を挙げることができる。また、教科書の図版を正確に描いたものではなく、手本を臨画し、背景や一部異なる表現を加えることにより独自の表現を出そうとする作品や、二つ以上の手本を合成した作品等、単純な臨画から創作味を持たせた表現がみられた。さらに、教科書から離れ、画家の絵や雑誌の挿絵のほか、写真や絵葉書き等に手本を求めたとみられる作品もあり、教科書以外の資料を用いて表現の幅を広げていたようであった。

大正年間の図画作品は、大正9(1920)年度を境に表現に大きな変化をみることができた。この年の作品は男女とも水彩による風景の写生画が多く、各作品は鉛筆により丹念に建物等を写生した上に淡彩で仕上げたものであった。木造の家や橋、木、電線や電柱、煙突のある工場等、いずれも近隣の風景を写生したものと思われる。ただ、同年度の作品には数は少ないが臨画もあり、自由画一辺倒の教育実践ではなかったと考えられる。その後、大正12(1923)年度の作品に初めてクレヨンが使用され、それ以降大正後期にかけてクレヨンや水彩による風景の写生画、野菜や果物、瓶等の静物画が描かれたほか、臨画も確認することができた。このことから同校の自由画教育として、大正9(1920)年度の作品に突如として風景の写生画が多く出現したこと、大正12(1923)年度の作品に初めてクレヨンによる風景画が現れたこと、自由画教育時代においても臨画が許容されていたことを確認することができた。

ところで、画家山本鼎が提唱した自由画教育は全国的な隆盛を極めるに至ったとされるが、その過程においては自由画展覧会が各地で開催され、それがマスコミに取り上げられたことから、教育関係者のみならず一般の人々にも自由画が広く知られるところとなった。従前の臨画を否定し、図画教育の新たな姿を示そうとした自由画展やその報道は人々の関心を誘い、この時代の教育実践に影響を与えたと思われる。

博労校の所在地、高岡市における最初の自由画展の開催は、大正9(1920)年9月に行われた大阪朝日新聞社主催による世界児童自由画展覧会であった。この自由画展は高岡の人々にとって、おそらく国内外の作品に接する初めての機会となり、自由画教育への関

心を高めたのではないかとと思われる。この展覧会の開催時期と博労校で自由画教育が導入されたとみられる時期はほぼ一致していることから、この展覧会が同校の自由画教育の契機となったか、あるいはその推進に一定の役割を果たしたのではないかと推測することができる。そこで同展覧会に関する新聞記事を参考に、その報道内容や自由画への関心を探り、この展覧会後の博労校児童の図画表現がどのように変容したのかを確認するため、大正中期から後期にかけて制作された作品の分析を行った。

その結果、世界児童自由画展覧会が高岡の人々に大きな反響をもって迎えられ、児童たちが残した感想から自由画制作に大変な興味と意欲をかきたてられた様子を知ることができた。特に高岡の児童の反応は展示された欧米の子どもの絵のように「上手になりたい」と願うものが多く、図画に対する積極的な姿勢として技術的な上達を目指そうとする意欲がよく表れていた。児童からも手本から離れた図画表現の意識が芽生え、自由画鑑賞が意識改革を促進させたと思えることができる。また、「児童の描ける自由画」として、この自由画展に展示された作品が高岡新報に掲載されたが、その中に博労校六年児童による作品を確認することができた。こうしたことから、展覧会開催時には同校で自由画教育が実践されていたとみてよいと思われる。大正8(1919)年度の卒業作品を参考にすると、大正9(1920)年度の第一学期には自由画教育が行われていたと推測することができる。

また、大正中期から後期の図画作品には風景写生画やクレヨンの流行をみることができたほか、自由画教育が児童の作品制作において画材、表現、意欲にわたり大きな影響を与えていたことがわかった。この時期の作品には静物画や考案画も残されており、風景の写生画と共に自由画期を代表する図画のテーマであった。構図や明暗の表現、色の塗り方などをみても年々表現技術の向上がみられるが、それを手助けしたものとして自由画期の指導における専科教師の存在を無視することはできない。自由画時代における図画教育の一側面として、一般に指導の放任が指摘される。しかし、図画の専科教師が勤務していた博労校の図画教育は、放任とは逆の方向にあったのではないかと指摘できる。各年度の作品に共通する表現上の特徴が認められたことは、専科教師による積極的な指導があったことを物語るものである。表現技法に関する指導が徹底され、児童の表現力を高めようとした痕跡がこの時期の成績品に現れていた。放任という状態に陥りやすかった自由画教育であるが、同校の図画専科教師の存在は児童の図画表現を支え、その発展を目指したという意味において大きな役割を果たしたと言えるのではないだろうか。このことは、言い換えれば大正期の博労校図画教育の成

果として捉えることができると思われる。

(2) 作品資料のデジタル化

作品資料のデジタルアーカイブ化では博労小学校に保管される卒業作品のうち、作品調査に合わせ明治期から大正期、および昭和戦前期までの作品のデジタル化を実施した。デジタル撮影の過程では、作品保管庫に年度別に分類されている作品の一部に異なる制作年のものが収められている等混乱がみられたため作品資料の整理を行った。また、制作年のわからない作品については、名簿や表現内容等を手掛かりに慎重に制作年の特定を進めた。作品のデジタル化にあたっては、タッチパネルを活用することにより、資料の拡大などタッチ操作による作品の閲覧が可能となり、作品資料の電子化の意義を実感することができた。

(3) 今後の課題

本研究では、研究代表者の領域である美術教育にかかわる図画作品の調査が中心であったが、今後は図画表現に関連して作文、習字作品に関する調査を行い、表現研究をより充実させたものにしていきたい。また、図画教育実践の変容について検証するため、明治期の臨画教育より平成年代までの作品調査をより丁寧に行いたい。さらに、博労校には大正中期より女子高等科が併設されていたが、同校所蔵作品の中に高等科卒業作品も保存されており、尋常科に続く作品調査として高等科作品の調査に取り組んでいきたい。

作品資料のデジタル化に関しては、作品研究の進捗に合わせ昭和戦前期までの作品を対象としたが、今後、学術研究の基礎資料となるよう、戦後の作品調査を行いながら博労作品全体のデジタルアーカイブ化を進めていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

蜂谷昌之、大正期における自由画への関心と図画表現の変容、美術教育学研究、査読有、第46号、2014、pp.213-220

蜂谷昌之、博労小学校所蔵児童作品にみられる自由画教育 - 大正期の作品に着目して - 、大学美術教育学会誌、査読有、第45号、2013、pp.295-302

蜂谷昌之、戦時体制下における表現作品制作の取り組みに関する調査 - 博労小学校所蔵児童作品から - 、大学美術教育学会誌、査読有、第44号、2012、pp.351-358

蜂谷昌之、博労小学校所蔵児童作品への調査と課題 - これまでの研究成果と作品欠落期に注目して - 、大学美術教育学会誌、査読有、第43号、2011、pp.279-286

[その他]

ふるさと風土記 ばくろう思い出館 教育史の貴重な資料、北日本新聞、2012.12
博労小学校卒業記念作品展「なつかしの卒業画 111年間の思い出」における研究報告(ポスター)、作品資料の図録及びタブレット端末の展示、於北日本新聞高岡支社ギャラリー、2012.8

100年の児童作品資料化 博労小「思い出館」調査、北日本新聞、2011.8

蜂谷昌之、戦争中の子どもたち - 消えた七年間の卒業作品 - 、富山県高岡市立博労小学校創立110周年記念式典記念講演、於高岡市立博労小学校、2011.6

書と作文もデータ保存 1901年以降の卒業生作品 - 高岡・博労小 教育研究の史料に、富山新聞、2010.5

6. 研究組織

(1) 研究代表者

蜂谷 昌之 (HACHIYA, Masayuki)

広島大学・大学院教育学研究科・准教授

研究者番号：60510542